

Georges Forestier, *Jean Racine*,
Gallimard (NRF Biographies), 2006, 942p.

永 盛 克 也

フランス文学の分野において作家の伝記的研究は近年充実が著しい。この傾向はしかし伝統的な意味での「人と作品」（伝記的事実と作品解説の並列的提示，あるいは前者による後者の因果論的説明）への回帰を意味するのではない。近年の伝記的研究の特徴は作家に関する一次資料の発掘や再検証の徹底に加え，文化史・思想史的背景への細心の目配り，そして何よりも作品の生成過程に注がれる深い関心に存するようにみえる。「作家の伝記は作品の伝記である」¹⁾ という認識は作家の生きた時代やその作品のジャンルを問わず，今や広く共有されているといえるのではないだろうか。

フランス17世紀演劇研究の第一人者である Georges Forestier 教授（パリ第4大学）がわれわれに問うこの浩瀚なラシーヌ（Jean Racine, 1639-1699）の伝記も，そうした作家と作品への総合的アプローチの成果であるといえるだろう。新史料の発見と呼べるものは確かにない。しかし既知の史料および従来の見解に対する批判的検証は厳密であり，その上でいくつかの新たな解釈が提示されている点は高く評価できる。また作家が生きた時代と社会，身を置いた環境や集団についての丁寧な説明は専門家以外の読者にも有益であり，特に同時代の演劇の状況についての精彩に富んだ記述は著者の面目躍如たるものがある。さらに作品創作のプロセスについて詳細な解説が随所に盛り込まれている点も，本書の大きな特徴であろう。周知のようにラシーヌの創作活動の実際について資料は乏しい。戯曲の草稿も，主要な悲劇作品の創作時期（1666年-1675年）に書かれた書簡も残されていないため，創作過程を探るには序文やヴァリエントの他，間接的な証言資料などに頼るしかない。これに対し Forestier は創作原理としての詩学と同時代の劇作術の見地から悲劇の創作過程—主題の選択，筋の構築，エピソードの挿入—を再構成した上で，モデルとなる古代の作品や借用されるテキストとの比較分析を通して，作家の仕事の核心に迫るのである。この点において本書は1999年に出版された Forestier 編纂のプレイヤーード新版の延長線上に位置づけられるといえよう²⁾。

*

作家の末息子ルイ（Louis Racine, 1692-1763）が残した『ジャン・ラシーヌの生涯と作品についての若干の特殊事情を含む覚え書き³⁾』（1747年）には多くの興味深い逸話が語られており，19世紀初頭以来作家の全集版に収録されるのが慣例となった。しかしその記述は実証の見地からすると不完全かつ不正確であり，特に世俗的な成功を求めた劇作家が改心により敬虔なキリスト教

徒となる過程を描こうとする「聖者伝的」傾向が顕著であることから、その史料価値には疑義が出され、厳密な意味での歴史的・客観的方法の必要性が認識されるようになる⁴⁾。「フランス大作家叢書」版全集の第1巻(1865年初版)に収められたPaul Mesnardによる証拠史料付の伝記概要はその歴史的 방법이適用された例であり、今なお参照する価値のある文献である⁵⁾。Raymond Picardによる『ジャン・ラシーヌの経歴』(1956年初版)はさらなる史料収集の成果に基づき、作家の生涯を彼が生きた社会の文脈の中で理解しようとする試みである⁶⁾。ともにラシーヌ作品全集の編纂者でありながら、その全集において「人と作品」を可能な限り詳細な注釈とともに提示しようとしたMesnardに対し、Picardは「人と作品」の混同を厳しく斥け、実証的伝記研究と作品解釈とを截然と区別しようとしたといえる。

ではラシーヌの伝記研究に残された課題は何か。細部の事実関係をさらに厳密に検証すると同時に、作家の生涯全体について妥当な展望を示すこと—1999年に行われたラシーヌ没後300周年記念シンポジウムにおける講演においてJean Mesnard教授はこう問題を提起した上で、幼年期から晩年までを結ぶ導きの糸として作家とポール・ロワヤルとの関係が重視されるべきであり、この視点によってこそ作家の人格の感情的部分と知的部分の双方を理解することが可能になる、と主張している⁷⁾。

Forestierはこのように提起された課題を引き受け、見事な成果をあげている。まず、Picardが実践した史料批判をさらに徹底させ、個々の問題を根底から洗い直し、確度の高い情報のみを選択した上で、最も筋の通った説明を与えようとする堅実で粘り強い姿勢は賞賛に値する。一例を挙げよう。遺産も頼るべき親族もなかった孤児ラシーヌが奇跡的にポール・ロワヤルに拾われた、とする従来の説⁸⁾に対し、両親の死後、まずは父方の祖父が、その祖父の死後は地元でも有数の名士であった母方の祖父ピエール・スコナン(Pierre Sconin, 1576-1667)がラシーヌの後見人となった事実をこれまで注目されることのなかった公正証書に基づいて指摘した上で、父方と母方の双方の一族において孫の教育に必要な配慮が欠けることはなかったはずだ、という結論が導かれる(p. 35-37)。

他方、Forestierは矛盾と断絶に満ちたようにみえるラシーヌの生涯を統一的に説明する糸口をポール・ロワヤルで受けた特権的教育に見いだす。ポール・ロワヤルで修道生活を送る「隠士たち」の運営する「小さな学校」で修得した人文主義的素養と知的洗練がなかったならば、ラシーヌが文人の道を選択することも、劇作家として成功することも、国王の修史官に任命されることも、宮廷人として栄達することもなかったであろう。「小さな学校」における教育の革新的な側面、とりわけ要約ではなく古典古代の書物に直接触れ、テキストを解釈する習慣、ラテン語作文より羅文仏訳を、そしてラテン語ではなく母語による知識の習得を重視する教育を通して、ラシーヌは古代の作家の思想に直接触れ、より深い読み方を身につけると同時に、洗練されたフランス語の文体を獲得するに至ったのだと考えられる(p. 64-69)。問題は知的なレベルにとどまらない。ラシーヌが生涯の最後において、真の「オネットム honnête homme」であると同時に真のキリスト教徒である、という評価を受けていた事実は、生涯の出発点において涵養された資質—キリスト教徒としての謙譲と節度を伴う生活態度 *civilité chrétienne*—が世俗的人間関係における洗

練された態度—サロンや宮廷における会話を中心とした社交的礼節 *civilité mondaine*—と矛盾することなく調和のとれた姿を示すに至ったことを証明するものであろう (p. 14-15, 63-64)。ポール・ロワヤルからポール・ロワヤルへ—一切の抗弁を排し、事実のみを伝える簡潔な文章の中に静謐な美をたたえる『ポール・ロワヤル史概要』(未完、第1部1742年、第2部1767年刊行)はラシーヌの生涯の円環を見事に閉じているようにみえる。

*

Forestierによって再度俎上に載せられ、従来の説に修正が加えられたケース、あるいは新たな角度から説明された問題をいくつか指摘しておこう。

・ポール・ロワヤルとの関係

孤児ラシーヌを預かっていた父方の祖母マリー・デムーラン (Marie Desmoulins, 1596-1663) が1649年の夫の死後、生活に困窮した結果、孫を連れてポール・ロワヤルに來た、という従来の説は退けられる。彼女がポール・ロワヤルに來たのは早くとも1651年であり、ラシーヌは祖母よりも前に(1646年あるいは1650年に)パリのポール・ロワヤルに受け入れられた可能性が高い (p. 52-55)。また従来考えられていたようにラシーヌが1664年にポール・ロワヤルと絶交した事実はない。女優との交際を理由にして甥が郊外のポール・ロワヤルを訪れることを拒否したアニエス・ラシーヌ (Agnès Racine, dite Mère Agnès de Sainte-Thècle, 1626-1700) の手紙は従来1663年に書かれたものと考えられていたが、1675年か1676年頃のものだと考えられる (p. 219-220)⁹⁾。

・『アレクサンドル大王』をめぐる「裏切り」

ラシーヌの悲劇第2作『アレクサンドル大王』は1665年12月4日にパレ＝ロワイヤル劇場でモリエール劇団によって初演された。その興行が終了していないにも拘わらず、そして当の劇団に無断のまま(少なくともモリエール劇団の興行収入帳簿である *Le Registre de La Grange* にはそのような記述がある)、2週間後の12月18日にライバル劇団であるオテル・ド・ブルゴーニュ座で同作品の上演が開始された事実は、「作品が出版されるまでは初演を行った劇団に独占上演権が属する」と看做す当時の演劇界の不文律を破るものであり、モリエール劇団の役者の演技への不満から、悲劇ジャンルを得意とする「王立劇団」と密かに通じた野心家ラシーヌの「裏切り行為」によるものだ、と考えられてきた¹⁰⁾。しかし12月14日の時点において、私的な場(ダルマニャック伯爵夫人邸)とはいえ、この作品がブルゴーニュ座の団員によって王の面前で上演された事実を考慮に入れると、そしてモリエールが公には抗議の意を示していない点をも併せ考えると、「上演権の移譲」はより高いレベルで—つまり王の意向を反映する形で—決定されたのではないかと推測されるのである (p. 241-244)¹¹⁾。

・『想像上の異端に関する手紙』論争の背景

演劇の道徳性をめぐるラシーヌとポール・ロワヤルとの葛藤(1666年-1667年)は、17世紀を通して続いた演劇論争中の一エピソードとしてだけでなく、作家の性格の一端を示す事例としても興味深い。自らの才能を発揮する場として選んだ演劇を糾弾する恩師に対し、自らの選択の正しさを主張するためにあらゆる論点を用い、辛辣な文章で相手を揶揄することも辞さない態度は、後年に書かれる自作悲劇の弁護のための序文にもみられるものである(その文才や論争の才がポ

ール・ロワヤルで培われたものであることもまた一つの逆説である)。ただしこの論争はラシーヌの性格によってのみ説明されるものでもない。ラシーヌが恩師たちの態度にみる矛盾—演劇を批判しておきながらテレンティウスの喜劇を翻訳した点—は「敬虔なユマニズム」が抱える矛盾なのだ (p. 760), という指摘は重要である。そもそもポール・ロワヤルの教育が古典古代の作家の読書を重視するものであった以上、生徒が異教古代の詩人や劇作家の魅力に敏感になることは当然であり、その意味でラシーヌはポール・ロワヤルの人文主義がはらむ矛盾の最もすぐれた犠牲者なのだと考えられる (p. 71-72)。

・『フェードル』序文末尾の一節

1677年3月に出版された『フェードル』の序文末尾において、観客を楽しませると同時に道徳的な教化を目指すことが「最近悲劇を断罪した、信仰心と学識によって名高い多くの人々と悲劇とを和解させる手段になるかもしれない」とラシーヌは述べている。この一節はポール・ロワヤルの恩師たちに向けて和解の意志を示すために書かれたものではないか、とする解釈が従来からあったが、演劇の道徳的効用そのものを否定しているニコル (Pierre Nicole, 1625-1695) がこの箇所で念頭におかれているとは考えにくい。むしろこの一節は『フェードル』初演後にラシーヌとプラドン (Jacques Pradon, 1644-1698) 双方の作品について発表された匿名の批評¹²⁾に答えるため、出版直前の段階で付け加えられたものではないか、そして「多くの人々」の中には数年前から恋愛悲劇の風潮に批判的だったイエズス会士のラパン (René Rapin, 1621-1687), ヴィリエ (Pierre de Villiers, 1648-1728) あるいはブーウール (Dominique Bouhours, 1628-1702) などの批評家たちが含まれているのではないかと解釈される (p. 567-569)¹³⁾。

・劇作家ラシーヌの「引退」

円熟期にあったラシーヌの劇作からの突然の「引退」については従来様々な説明がなされてきた。しかし文人としての名声ゆえに国王の修史官に任命されたからには、劇作を断念して光栄ある職務に専従することは当然のことであった。この点についてPicardの見方は正しい。だが、この「キャリアアップ」を根拠にして、ラシーヌにとって劇作は社会的上昇のための手段にすぎなかったのだと述べるとき¹⁴⁾、その記述にはバイアスがかけられているといえるのではないか。Forestierはむしろそこに連続性をみる。20才で国王の結婚祝賀の頌歌を書いて以来、詩人として、また劇作家として絶えず成功と名声を求めてきたのは事実だが、それは社会的地位に対する野心とは異なる次元のものであって、国王の修史官としての任務は詩人としての活動の延長線上にあるものだ、と結論している (p. 579-580)。

＊

『フェードル』以後、アカデミーの重鎮として、非のうち所のない宮廷人として、思慮深い父親として、またポール・ロワヤルの支援者としてラシーヌが生きた22年の歳月について詳細な記述がなされている点も特筆すべきだろう。しかしそこには生涯を通して変わらないラシーヌもいる。マントノン夫人 (Françoise d'Aubigné, marquise de Maintenon, 1635-1719) の依頼により創作した『聖歌』(1694年)の草稿について友人ボワロー (Nicolas Boileau, 1636-1711) の忌憚ない批判を「懇願」するラシーヌ、劇作家としての自らの過去と距離を置こうとしていたにも拘わら

ず、最後の作品集（1697年）に収録される悲劇に細かい修正の手を入れるラシーヌ—作品の完成に細心の注意を払う完全主義者としての詩人ラシーヌの一貫した姿勢をForestierはそこにみている（p. 769-771, 803-804）。

以上紹介した例が示すように、ラシーヌの生涯に見いだされる謎、矛盾あるいは逆説について、それらを時代の文脈の中に置きなおし、背景をふまえて考察することによって可能な限り整合的に説明しようとする努力をForestierは惜しまない。結果として従来の説が覆されることもあり、読者は大きな知的興奮を覚えるだろう。また、膨大な情報を盛り込みながらも、文章にはいささかの冗長さもなく、それぞれの問題について明快な結論と総括が提示される点で、読者の理解は大いに助けられる。本書が今後のラシーヌ研究における必読文献となることは間違いないが、ラシーヌの生涯と作品について総合的展望をえるためだけでなく、17世紀のフランスについて理解を深めるためにも有益な書であるといえよう。

注

- 1) Jean-Yves Tadié, *Marcel Proust. Biographie*, Gallimard [1996] (folio), 1999, t. I, p. 11.
- 2) Racine, *Œuvres complètes*, t. I, théâtre-poésie, éd. Georges Forestier, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1999, cvi+1801p. 作品創作のプロセスについてはブレイヤード新版の解説がほぼそのまま本書に再録されている。Forestierの研究の要点についてはこのブレイヤード新版の書評（『仏文研究』30号, 1999年, 233-236頁）で既に触れたので、ここで17世紀の詩学と劇作術について改めて論じることはしない。
- 3) Louis Racine, *Mémoires contenant quelques particularités sur la vie et les ouvrages de Jean Racine* [1747], repris dans Racine, *Œuvres complètes*, t. I, éd. Forestier, p. 1114-1205.
- 4) Paul Mesnard, « Avertissement », dans *Œuvres de J. Racine*, Hachette (Les Grands Écrivains de la France) [1865-1873], 2^e éd., 1885-1888, 8 vol. et 2 albums ; t. I, p. xx-xxi. Raymond Picard, Présentation des *Mémoires* de Louis Racine, dans Racine, *Œuvres complètes*, Gallimard (Bibliothèque de la Pléiade), 1950-1952, 2 vols. ; t. I, théâtre-poésies, p. 3-4. Cf. Georges Forestier, « Notice », dans Racine, *Œuvres complètes*, t. I, éd. Forestier, p. 1769-1772 ; *idem*, « Le véritable saint Racine d'après les *Mémoires* de son fils », dans *Jean Racine 1639-1699, actes du colloque Île-de-France – La Ferté-Milon* (1999), éd. Gilles Declercq et Michèle Rosellini, PUF, 2003, p. 749-766.
- 5) Paul Mesnard, « Notice biographique », éd. cit., t. I, p. 1-177 ; « Pièces justificatives de la Notice biographique », *ibid.*, p. 179-203.
- 6) Raymond Picard, *La Carrière de Jean Racine*, Gallimard (Bibliothèque des idées) [1956], nouv. éd. rev. et augm., 1961, 718p. Picardが冒頭でこれは「伝記ではなく、一つの経歴の歴史であり、そこにおいてラシーヌの生涯のさまざまな事件はとりわけそれが物質的かつ社会的反響をもった限りににおいて考察される」と述べている通り、作家の置かれた社会的・経済的条件をも視野に入れた社会学的アプローチがその特徴の一つであった。なお、同じPicardの編纂によるラシーヌとその同時代人によって残された文献・証言資料の網羅的編年目録は研究者にとって今なお貴重な参考図書である。Raymond Picard, *Nouveau corpus racinianum. Recueil-inventaire des textes et documents du XVII^e siècle concernant Jean Racine*, édition cumulative, Éd. du CNRS, 1976, 529p.
- 7) Jean Mesnard, « Racine, Nicole et Lancelot », dans *Jean Racine 1639-1699, op. cit.*, p. 368-369. なお、この問題については次の論考を参照のこと。塩川徹也「ラシーヌとポール・ロワヤル」、『ラシーヌ劇の神話

- 力』(小田桐光隆編, 上智大学出版会, 2001年)所収, 27-51頁。
- 8) Raymond Picard, *La Carrière de Jean Racine*, p. 21-23.
- 9) いずれの点においても Forestier は Jean Mesnard の説に依拠している。Jean Mesnard, art. cit., p. 341, 356-357 ; *idem*, « Racine et Port-Royal : autour d'un épisode inconnu », dans *La « Guirlande » de Cecilia. Studi in onore di Cecilia Rizza*, Schena/Nizet, 1996, p. 557-565.
- 10) Raymond Picard, *La Carrière de Jean Racine*, p. 108 sq.
- 11) プレイヤード新版の解説も同様。Racine, *Œuvres complètes*, t. I, éd. Forestier, p. 1279-1280. なお Jean Pommier も既に同様の推測をしている。Jean Pommier, « Le tricentenaire de l'Alexandre-le-Grand de Racine », *Revue des deux mondes*, 1^{er} décembre 1965, p. 348-349 ; *idem*, « Autour de l'Alexandre de Racine », dans *Mélanges R. Lebègue*, Nizet, 1969, p. 266-267.
- 12) [Anonyme], *Dissertation sur les tragédies de Phèdre et Hippolyte* [1677], repris dans Racine, *Œuvres complètes*, t. I, éd. Forestier, p. 877-904.
- 13) プレイヤード新版の解説も同様。Racine, *Œuvres complètes*, t. I, éd. Forestier, p. 1623-1624. この点についても Pommier が既に同様の解釈をしていることを付け加えておく。Jean Pommier, *Aspects de Racine*, Nizet, 1954, p. 68 sq.
- 14) Raymond Picard, *La Carrière de Jean Racine*, p. 284.